みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

岳飛の社会記憶とその資源化：杭州岳王廟を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 韓, 敏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008626

塚田誠之・河合洋尚編『中国における歴史の資源化の現状と課題』
国立民族学博物館調査報告　142:9-29(2017)

岳飛の社会記憶とその資源化
── 杭州岳王廟を中心に

韓　敏
国立民族学博物館

はじめに

悠久の歴史をもつ中国では，歴史が常に為政者，知識人や民衆に様々な形で記憶され，利用されてきた。本稿は，岳飛という歴史にかんする社会記憶を整理し，墓・廟およびその付随物である題字，伝説と儀礼を通して，王朝・国家，地方行政，岳廟文化研究会，岳氏一族が岳飛という歴史人物をどのように記憶してきたのかを明らかにする。また，岳飛の社会記憶が，家族の結集，地域及びナショナル文化の構築の資源としてどのように利用されてきたかを検討する。

岳飛（1103-1141）は，河南湯陰県うまれの南宋（1127-1279）の名将である。項羽，関羽と並んで三大武将と言われているが，宋代の儒家朱熹が「純忠純孝，大文大武」と評価したように，岳飛は，中国歴史の中でまれに忠孝と文武を兼備する英雄としても知られている。

農民の子として一兵卒からたたきあげ，女真族の国「金」に抗戦し，民衆の絶大な人気を博した岳飛は，和親派の秦檜（1090-1155）らの計略で投獄され，南宋の都である臨安（現杭州）大理寺の獄中にて殺害された。その背には母親によって彫られたとされる入れ墨の「尽（精）忠報国」の４文字があったという。1162年，宋孝宗は岳飛の生前の官職を回復させ，礼をもってその遺骸を現在の場所，杭州西湖のほとり，棲霞嶺の南側の麓へ改めて埋めた。1221年に墓の隣に廟も建造された。12世紀の南宋から元，明，清，民国期を経て，岳墓・廟は岳飛を忍ぶ聖地と儒家文化の史跡としてあがめられてきた。現在も杭州観光の目玉として，訪れる人があとを絶たない。2007年杭州市民の投票により，「岳廟棲霞」は，「新杭州十景」の一つとして撰ばれた[1)][阮 2016]。2011年，パリで開催された第35回世界遺産大会において，杭州の西湖は「世界文化景観遺産」[2)]として登録されたため，西湖のほとりにある岳王廟は世界文化景観の一部として，再び注目されるようになった（写真１）。

文化や歴史の資源化を考える場合，通常個々人が生きる家庭・職場・学校・地域社会などのミクロな日常実践の場，そしてミクロな日常実践の場を超えた国家と市場という，３つの社会的次元が考えられる［山下 2007: 15-16］。様々なレベルの行政の統制力が，

写真１　杭州の岳王廟（筆者撮影，2015年８月）。

社会の隅々まで浸透している中国では，ミクロな日常実践の場を取り上げる場合，国家のみならず，市や省などの地方行政の統制力を抜きにはして考えられない。また，国家，市場とミクロな日常実践の場を考察する場合，支配と被支配，あるいは対抗や抵抗的なものとみなす考え方には注意する必要がある。人類学上，1980年代以降国家と社会の関係性を問う欧米の議論では，抵抗論に見られるように，しばしば国家と社会の対立関係を前提に議論が進められてきた［Scott 1985; 1990］。実際に，国家と社会は，目指す方向が一致しない場合，せめぎ合いながら競合したり，妥協したり，あるいは協働したりしてダイナミックな関係性を生み出していく可能性がある。

筆者は2015年８月と2016年９月に杭州にある岳飛の墓と廟に焦点をあて，文献調査のほかに，杭州西湖風景景区管委会・杭州園林文物局，岳廟管理委員会，岳氏一族，岳飛研究会，観光客，ガイドと売店の店員などを対象に聞き取り調査と参与観察をおこなった。本論文は，岳飛という歴史人物がだれにどのように記憶されてきたのか，すなわち記憶の主体性と記憶の形に注目し，南宋，元，明，清，民国と中華人民共和国の時代変化とともに，岳飛記憶とその意味の変化を分析する。また，複数の記憶主体の関係性に注目しながら，岳飛の歴史記憶とその資源化の実態を明らかにする。

1　武穆から愛国英雄への系譜 ― 岳飛の歴史表象とその変化

岳飛が亡くなった28年後の1170年に南宋孝宗帝が彼の最後の任地である武昌に「忠烈廟」を建て，さらに1178年に武穆という諡号を与え，1204年には鄂王に追封した。諡号は通常帝王などの貴人の死後に奉ずる，生前の事績への評価に基づく名のことである。諡号には大まかには「美諡」「平諡」「悪諡」の三ランクがあり，美諡の最高位が文，次に武というようにさらにランク分けがなされている。「穆」という漢字も「美諡」の入っている諡号であり，世の中が静まって穏やかなことを意味する。後に「忠武」（1225年）

の諡号も与えられた。1261年に，宋理宗が岳飛に「忠文」という諡号を与え，彼より上の三世代と部下の6人の大将も追封した。これは，国を救った忠烈としての功績を讃えたととらえられるが，同時に，民衆の中にある岳飛の名声を利用して，北の「金」と対峙するという南宋王朝の意図も否定できない。南宋末期の民間では，岳飛の人気が高く，「東窓事発」[3]をテーマにした雑劇が盛んに上演され，それが元朝になってもたえまなく上演され続けた。

北方の騎馬民族であるモンゴル人支配の元代においても忠孝を推奨する儒教や南宋理学の影響が依然として維持されていた。岳飛に対する元朝政府の評価をよく表す歴史の資料は，二十四史の一つとされる，元朝時代に国家が編纂した『諸史抄・宋史（岳飛伝）』［長澤 1973］と言える。その中で，岳飛は西漢以来，まれに見る「文武全器，仁智并施」の模範として評価さている。地方政府と郷紳が連携して，廟を修繕し，大量の松と柏などの木を植えた。現在も岳王廟の境内には，樹齢520-620年といわれる香樟が数本残っている。各木には，木の名前，樹齢，場所などが記載された管理番号がふられている。岳氏一族も廟の修繕に当たっている。至正9年（1349）において，岳王廟は増築され，岳飛のほかに，張憲と岳雲が両側に配祀されるようになり，1361年に「保義」の扁額も新たに加わった。

北方の異民族から中国の支配権を取り戻した明代になってから，朱元璋が洪武9年（1386）に南京に歴代帝王廟を建てる際に，岳飛を37の名臣の一人とし，宋太祖に従祀するようにした[4]。一方，1449年に起きた「土木の変」[5]を含む北方の異民族による進入の脅威は，北宋末期の「靖康の変」を喚起させ，岳飛の人気の再燃のきっかけを作った［劉 1987; 孫・黄 2013］。各地に岳廟が建てられるようになった。48年間も在位し，明の皇帝の中でもっとも在位期間が長い万暦帝（1563-1620）は，万暦33年（1605）に関羽に「三界伏魔大帝神威遠震天尊関聖帝君」，岳飛に「三界靖魔大帝忠孝妙法天尊岳聖帝君」（略して「三界靖魔大帝」）の称呼を与え，二人を合祀するようにした。これらの称呼は，その後よく道教の呪符として利用されている。また，民間において明代の岳飛雑劇も元代と比べて，テーマが多く，征戦の場面が増える。

清朝において，康熙54年（1715）に岳墳・廟を修繕し，さらに岳飛の大将，父母，5人の息子と息子の嫁，娘と孫を祭祀する場所も増設した。民間においては，岳飛の演劇は明代と同じように盛んだった。岳飛の表象や記憶に関しては，これまでの王朝と比べ，清朝の王朝権力が直接介入するようになった点が大きな変化である。金の後裔と自称する満州人の清王朝は，山海関より南に入ってから，民間で抗金名将として崇拝されている岳飛を押さえようとして，「関羽代岳飛」（関羽を用いて岳飛に代える）という戦略をとった。具体的に関羽を武聖にし，異民族政権の金に抵抗するための忠誠を，劉備に尽くす関羽の忠誠にすり替えようとした。また清雍正帝が，1726年に岳飛を武廟から移し，岳飛関係の演劇も禁止されるようになった。

一方，清乾隆帝は，岳飛の書道，文章と精忠の精神に惹かれ，乾隆15年（1750）に河南に巡幸したときに，自ら岳飛の故郷，湯陰にある岳廟を参拝し，大臣を派遣して祭祀した。また，1751-1784年の間に浙江を６回巡幸したうちの３回は，自ら杭州岳廟に参拝し，「偉烈純忠」などの題字をおこなった。残りの３回は皇子か大臣を派遣した（写真２）。

さらに岳氏一族に「重開奇秀，永佐朝邦，崇修喜彩，宗耀遠光，英賢輔弼，金玉其相，武穆家風，山高水長」という32個の輩行字を授けたという［林汝狄・林辰 2014: 67］。岳飛の子孫の話によると，岳飛から数えた22代目の岳氏は，上記の乾隆帝からの題詞を一族の輩行字として使用し始めたという。乾隆帝の題詞と岳氏一族の輩行字の関係性および輩行字の使用状況については，筆者が行った杭州の複数の岳氏の人々に対する聞き取り調査の中で確認することができた。また，北京の万寿山と昆明湖の間にある，屋根付きの皇帝の散歩道である頤和園の長廊には，岳飛の絵が描かれている。金との戦いに出る時，母が「精忠報国」という文字を背中に入れ墨した場面である。岳飛は清代の支配者にとっては敵にあたる人物だが，中国では英雄岳飛を知らない者はいないということで，描かれた一面もある。

「一廟を修めるは十万の兵を用うるに勝る」という乾隆帝の語に，はからずも彼の文化支配の柔軟性が映し出されている［村田 1994: 30-39］ように，上記のような，漢人の岳飛をめぐる満州人の支配者の扱い方からは，諸民族融和という清朝の文化支配の理念と戦略が見られ，またその理念にもとづき，漢文化の中にある忠孝の要素が利用され，岳飛の為政者に対する忠誠心が強調され，教化の道具として操作された意味が読み取れる。

近代において国家による岳飛の操作と表象は，主として外来勢力に抵抗する，あるいは国家の一体感と求心力を高める文脈の中で展開された。たとえば，1899年に甲午戦争（日清戦争）のあと，台湾が日本に分割された状況の中で，台湾の宜蘭地区の進士楊士芳

写真２　乾隆帝が1757年に杭州岳王廟参拝した際の揮毫（筆者撮影，2016年９月）。

の呼びかけでできた碧霞宮（岳飛廟）には，岳飛の言葉である「還我河山」の扁額が掲げられた。20世紀に入ると，日露戦争の翌年の1905年に，孫文らが中国革命同盟党を結成した。清末に結成された革命党は，満州を排除することを強調し，「龍華会」という組織の規定の中には，協会の入会はできるだけ岳廟でおこなうこと，家での場合は「少保忠武王岳爺爺」の神位を設け，鶏，鵞鳥，羊，酒などの供え物を用意し儀式をおこなうことが記載されている［孫・黄 2013: 928］。

孫文が率いた辛亥革命により，清朝が崩壊し，近代の国民国家である中華民国が誕生した。民国 3 年，袁世凱政府が清朝の関羽祭典を踏襲した上で，関羽と岳飛の合祀に関する法令を下し，「関羽合祀」を国家祀典の枠組みに入れた。貴州省安順市の武廟はその例である。1918年に孫文は，日本の箱根で作った詩歌の中で「岳飛魂」を謳えた。1928年「先哲類」の中では，岳飛とその他の十一人，漁猟を教えた伏羲（ふっき），医療と農耕の術を教えた神農（しんのう），最初の帝，中国人の先祖神の黄帝，養蚕を発明した女性の嫘祖（れいそ），文字の発明者の倉頡，農業の神とされる后稷（こうしょく），大禹，孔子，孟子，岳飛，関羽　工匠の祭神とされる公輸班（こうしゅはん）と一緒に，中華民族の先哲と英雄に認定された。特に1931年の九・一八事件（満州事変）以降，東北が日本軍に占領され，抗日ナショナリズムの雰囲気の中で，岳飛は再度注目されるようになり，国民政府教育部主催の下，岳飛の演劇が盛んに上演されるようになった。たとえば，孫江と黄東蘭の研究によると，1940年 4 月1–5日清明期間中に重慶の国靖大劇院で『岳飛』という演劇を上演。イギリス，フランス，アメリカ，ソビエトの大使および他の国の使節たちを招待し，「還我河山」の拓本をプレゼントした［孫・黄 2013: 923］。また，何玉紅の研究によると，抗日戦争中の浙江省温州市永嘉県では，地方政府と民間人が「迎祭民族英雄岳鄂王理事会」を作り，町の中でのパレードと祭祀儀礼をおこなった。北宋時代の抗金岳飛という歴史記憶が当時の抗日という実情と結ばれ，「歴史の資源が抗戦を促進する重要な推進力に転化された」［何 2015］。

中華人民共和国建国後，岳王廟に関するすべての運営と管理は，徐々に人民政府の管轄下に置かれるようになった。1956年から岳墳廟は，杭州市園林管理局の所轄になり，今日に到っている。1961年に国務院は岳飛墳を全国重点文物保護単位（文化財）に指定し，岳王廟は民族英雄記念館として運営されるようになる。開放改革以降，中央政府が政治優先の路線を是正し，観光産業化を推進する中，岳王廟は1979年に修繕され，民族英雄記念館の体制が中止され，観光地として開放された。

一方，改革開放後，拝金主義や脱イデオロギーの傾向が見られ，広大な国土，多数の人口を抱える中国を一つにまとめるために，中央指導者は，愛国主義のイデオロギーを新たな求心力とする方針をとり，「1982年憲法」に，愛国主義教育を初めて盛り込んだ。1993年 3 月，教育現場における愛国主義教育の実施状況についての調査が開始された。翌年に「愛国主義教育実施要綱」が共産党中央宣伝部により制定された。「愛国主義教育は対外開放の原則を堅持しなければならない。愛国主義は決して狭隘な民族主義ではな

く，我々は中華民族の優秀な成果を継承し発揚するだけでなく，資本主義先進国を含む世界各国が創り出したあらゆる文明の成果を学習し吸収しなければならない」[岡村 2004: 69-80]。すなわち，愛国主義教育の内容と素材は極めて幅広いものであり，「過去の歴史から現在の事象まで，物質的なものから精神的なものまで，社会生活のあらゆる面から愛国主義教育の素材を掘り起こし，愛国主義教育の内容を豊かにしなければならない」[岡村 2004: 69-80]。

上記のような状況の中で，杭州市の岳王廟は，1993年杭州市政府に「杭州愛国主義教育基地」，1995年浙江省政府に「浙江省愛国主義教育基地」，1996年に国家文物局，国家教委と文化部によって「全国中小学愛国主義教育基地」に指定された。

このように，岳王廟と岳飛の歴史表象は常に権力に影響され，外部からのさまざまな動きへの対応と中国社会内部の秩序と求心力の調整というコンテキストの中で展開されてきたといえる。

2 岳墳・廟──歴史記憶の場とその管理

中国本土には50あまりの岳廟がある[6)]。その中の開封朱曲鎮，湯陰，武昌と杭州にある岳廟は，四大岳廟として知られている。

岳飛を祭祀する最初の施設は，岳飛の生前，建炎４年（1130）に江蘇省靖江市生祠鎮中街に建てられた「岳忠武生祠堂」（「靖江生祠」ともいう）である。泰州の知州である岳飛が，金から難民を護った功績を記念するため，地元の民間人が祠堂を建てた。残りの岳廟は，岳飛の死後に建てたものである。死後に建てられた最初の廟は，宋孝宗が即位したあと，皇帝勅令により岳飛の官位を回復し，1170年に武昌に建てた「忠烈廟」である。当時，朝廷から1,000ムーの「香火田」が与えられた。

杭州の岳王廟は杭州市西湖区栖霞嶺南麓に位置し，正確に言うと岳飛の墓と廟を含む。清・光緒時代の馮培が編纂した『岳廟志略』の中で岳廟は「聖廟」ともよばれていた」[馮 1879（2004)]。岳飛は1142年に杭州大理寺の獄中，風波亭という場所で殺害された後，隗順という牢番がその日の夜にひそかに遺骸を持ち出し銭塘門外九曲叢祠わきに埋葬した。二本の橘の木を植え目印にしたという。宋孝宗が即位したあと，1162年に岳飛の官位を回復し，一品の礼をもってその遺骸を今日の西湖区栖霞嶺の南へ改めて埋めた（写真３）。

宋代には，墓の側に墳庵を作る習慣があった。岳王廟は墓に付属した建物で，南宋の嘉定14年（1221）に造られたものである。南宋朝廷が，岳飛の後裔の申し出に応じて，岳飛の墓の側にある智果寺を岳氏一族に授けた。のちに岳飛功徳院という名前に変わった。皇帝から「褒忠衍福禅寺」という額を賜った。これが杭州岳王廟の始まりである。

明代の英宗（1457-1464）は，「忠烈」の扁額を賜り，「褒忠衍福禅寺」の名前は現在

写真３　左は岳飛の墓，右は岳飛の長男，岳雲の墓（筆者撮影，2015年８月）。

の名前「岳王廟」になった。また，明代に岳飛の父母を祀る啓忠祠が初めて作られ，そこには岳飛の娘とされる銀瓶と孫の岳珂が配祀されている。また，1513年（明正徳８年），都指揮李隆が岳飛の墓の近くに秦檜，王氏，万俟卨（ぼくきせつ）の３人の跪像を作った。「死せる秦檜を鉄人として再生させ，さらしものの刑にかけて，醜を天下に晒させたい」という後世の民衆の思いが，このようなかたちとなった（写真４）。

南宋から今日まで墓や廟はいく度も破壊され修築を繰り返し，いまのような姿になったのは清代の整備以降である。民国７年（1918）に浙江将軍の楊樹堂が岳墳・廟の修繕を呼びかけ，1923年に後任の盧永祥の主催下竣工した。杭州の岳墳・廟の管理は，清代において，布政使司（地方行政の中心機関）に所属し，祭祀は岳飛の子孫によって担当されていた。廟の日常的支出費用や春秋大小祭祀の費用は司庫（財物出納の担当文官）により支出されたという。岳王廟の管理，祭祀と支出に関する地方行政，朝廷と岳氏一族の分業パターンは民国期までつづいた。

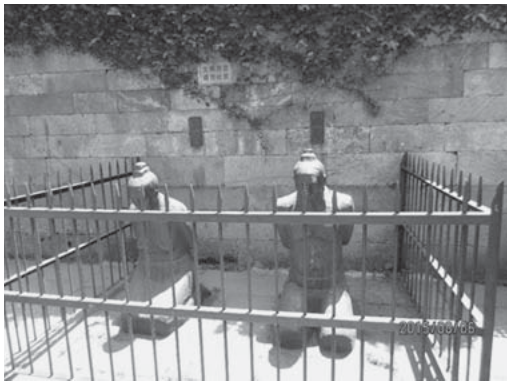

写真４　秦檜と妻，王氏の跪像（筆者撮影，2016年９月）。

岳飛の長男，岳雲の子孫の聞き取り調査によると，民国時期に，杭州市国民党政府により，岳廟管理員会が作られ，岳氏一族の代表もその委員会のメンバーとして入っていた。また，廟の建物，土地などの不動産及び扁額，祭祀用品などは，杭州市在住の岳雲の子孫たちによって所有されていた。また文献調査によれば，浙江省政府は岳廟財産に対して土地税５分の４を免除していた［李・瀋 2012: 156］。辛亥革命元老黄元秀らと岳王廟の岳氏が「精忠小学」（1924–1950）も創設した[7)]。

中華人民共和国建国後，岳王廟に関するすべての運営と管理は，徐々に人民政府の管轄下に置かれるようになり，民族英雄記念館として開放された。1961年には国務院に全国重点文物保護単位（文化財）に指定された。1966年秋，文化大革命時期，岳飛の墓，塑像とその他の神像が壊されたが，1979年に修復され，現在，杭州の岳王廟は，岳飛を祭祀する最大な場所として注目され，毎年，100万人以上の観光客が訪れている。

現在の岳王廟は，基本的に清代康熙年間の配置と建築を踏襲しており，忠烈祠，啓忠祠，墓園と碑廊の四つの部分によって構成されている。

岳王廟門楼は，西湖の中にある岳湖と100メートルの距離にあり，昔人々が船でやってきて参拝していた。廟内に入ると忠烈祠という本殿があり，その表には中国軍事委員会副主席である葉剣英の題字「心昭天日」の扁額が掛かっている。この四文字は岳飛が殺害される前に書いた「天日昭昭（天は全て知っている）」に因んだものである。忠烈祠に入ると，正殿に高さ4.5メートルの岳飛の座像がある。その上には，岳飛の書いた「還我河山」の扁額が掛けられている。その周りに，明代福建甫田人，洪珠が書いた「尽忠」「報国」，中国仏教協会会長である趙朴初の「浩気長存」や中国近現代の篆刻家・書家の沙孟海の「碧血丹心」も掛けられている。忠烈祠の両側には東祠と西祠がある。昔，東祠は，五侯祠ともいい，岳飛の５人の息子が祀られ，西祠には５人の嫁と娘銀瓶の像が祀られていた。現在，そこには，岳飛の部下、張憲と牛皋だけ祀られている。忠烈祠の後ろには岳飛の自筆「文臣銭を愛せず，武将死を惜しまざれば，天下泰平たらん（文官不愛銭，武官不惜死，不患天下不太平）」という石碑があり，最近，庶民の人気スポットとなっている。石碑の前で人々が，岳飛の言葉を何度も読んだりして，記念写真をとり，今の世の中を嘆く姿が見られる。官僚腐敗の世の中，900年前の岳飛の言葉は，民衆のこころに響いているのだろうか（写真５）。

啓忠祠は，忠烈祠から少し離れたころにあり，現在三つの展示室からなる記念館になっている。第１展示室は少年時代と抗金時代，第２展示室は妥協に反対する忠誠の物語，第３展示室は後世への対する岳飛の影響や鄧小平などの指導者たちがここを訪れたときの写真が展示されている。

碑廊は，南北に分かれ，北廊には81枚，南47枚，合計128枚の石碑が展示されている。その中では岳飛が書いた諸葛亮の『前・後　出師表』の石碑がもっとも大きいとされている。岳飛の筆跡のほかに南宋から民国期までの有名人の岳飛を讃える題字が展示され

写真５　岳飛自筆の石碑「文官不愛銭，武官不惜死，不患天下不太平」（筆者撮影，2015年８月）。

ている。

墓園には，岳飛の墓とその長男岳雲の墓が並んでいる[8)]。岳飛の墓の前に「宋岳鄂王墓」，その息子の墓の前には「宋継忠侯之墓」の石碑が立っている。道の両側には，宋代の石像，石獣が立ち並び，墓地の近くに，「精忠柏亭」がある。杭州の民間伝説によると，これらの柏の木が岳飛の亡くなった日に突然枯れてしまったが，倒れはしなかった。のちに石となってずっと立っている。ツアーガイドが，現代の科学技術を用いてこれらを測定したら，なんとこれらの柏木は１億２千万年の歴史をもつ柏の木の化石であったと観光客に説明している。

世界文化遺産として認定された後，園内での焼香が禁止され，有料の菊の献花サービスが提供されている。1992年から境内には12の売店が設けられ，岳飛関連の書籍，子供向きの絵本，ボールペンなど，50種類あまりの観光みやげ品が販売されている。

1993年に岳王廟は杭州市愛国主義教育基地に認定された。その後，毎年旧暦の２月に「岳飛文化月」をおこなっている。また，時々，岳飛と直接関係のない，杭州，あるいは浙江地域の書道，絵画，考古学など，地域文化関連の展示会を集客力の高い岳王廟で開催する。入場券による収入を増やすと同時に地域文化を発信する窓口として機能させている。

岳墳・廟は，政治権力と結ばれる中，時代の流れとともに，かつての慰霊，祭祀，士気を動員する場所から記念の場，観光の地へと多元化されていく。

3　岳王廟における祭祀

岳王廟での祭祀活動は南宋（1127-1279）に始まったものである。明代1457（天順元年）年までは，岳飛の命日，旧暦12月29日におこなわれていたが，1457年９月27日に杭州府の地方官である同知，馬偉らが，生誕の地である河南湯陰の岳廟が年に春秋２回の

祭祀を行っているように，埋葬の地である杭州岳王廟にも同様な祭祀を許可するよう，朝廷に申し入れたところ，許可された。以来，清朝，民国期を経て中華人民共和国建国まで続いた。たとえば，清光緒５年の祭祀記録には，毎年旧暦の２月と８月に地方官で郡守らが良い日を選んで岳王廟に前泊し，明け方の３時から午前５時に祭服を着て祭典をおこなっていたとある。

官僚による命日の祭祀や春秋祭祀のほかに，民間では，岳飛は「岳老爺」とよばれ，道教，佛教，民間信仰の神として信仰されている。特に，養蚕が盛んな揚子江下流地域では，毎年春になると，周辺の農民たちがはるばる岳王廟を参拝に来て桑の生長と豊作を祈る（写真６）。

中華人民共和国以降，岳王廟は完全に政府の管轄のもとに置かれるようになったので，そこでの官民による祭祀活動は1988年まで禁止された。1988年４月１日杭州市政府機関である岳廟管理処が，建国後に初めて岳飛生誕885周年記念行事を主催した。その後，毎年，祭祀活動がおこなわれるようになり，2006年以降，祭祀活動は，岳飛生誕の日である２月15日におこなうようになった。

参加者は主として地方政府の職員，地元の学生，杭州市を含む中国各地，あるいは台湾，韓国の岳氏一族の代表である。たとえば，2015年岳飛生誕912周年の際に，100名近い岳飛後裔が，台湾，韓国などの各地から参拝にきた。

記念行事の趣旨は「岳飛の愛国精神を継承し，青少年が崇高な理想と信念を持つよう，また観光スポットとしての岳王廟の知名度とその影響力を上げる」ことにある。これらのイベントを企画した担当者への聞き取り調査や文献調査を通して，政府主催の岳飛記念行事は主に以下の三つの部分から構成されていることが明らかになった。

第一点は，歴史の専門家や学者と連携して学術座談会を毎年開催することである。その目的は，懇親会やシンポジウムを開くことにより，岳王廟の中で岳飛の精神とその価

写真６　民国期における民間祭祀。現在その写真は杭州岳王廟内で展示されている（筆者撮影，2015年８月）。

値について議論し，岳飛と宋代に関する研究を推進するところにある。

第二点は幼児や小中学生むけの祭祀活動を奨励することである。たとえば，岳飛の生誕日がある毎年旧暦の２月におこなう「岳飛文化月」の際に，地元の小学生たちが岳王廟に集まって「満江紅」を朗読したり，歌ったりする。また，「心の岳飛を描こう」という絵画コンクールや親子参加の岳飛将軍の凧作りと，岳飛ゆかりの「定勝糕」という伝統菓子作り等をする。

第三点は，市民や観光客向けの記念活動を実施することである。岳王廟で全国岳廟の写真展示会，岳飛後裔の山水画展示会などを開催し，2007年からネット上での岳飛記念ウェブサイトを開設し，岳廟にかんする情報を発信する。

これらのイベントを毎年開催するたびに，テレビや新聞社の記者たちが取材に来て報道する。

上記のように毎年春の杭州市政府機関である岳廟管理処主催の記念行事のほかに，岳氏一族が毎年秋に主催する記念行事もある。

4　岳飛とその子孫たちによる岳飛記憶と祭祀活動

岳飛の子孫による歴史記憶に関しては，まず，岳飛の孫，三男岳霖の息子にあたる（南宋）岳珂（1183–1240）が編集した『鄂国金佗萃編』と『鄂国金佗萃編・続編』という二つの有名な著作があげられる［岳珂 1999（1218）］。この２つの著作は岳飛に関するもっとも詳しい資料であると校注者の王曾瑜に評価され，「儒家の君臣や華夷のコンテキストにおける岳飛語りのひな形を形成した」と指摘されている［孫・黄 2013: 921］。上記の書物は，「岳飛の死よりもその生き様に力点をおいている」。たとえば，『鄂国金佗續編』に収録された「郢州忠烈行祠記」の中で，著者である南宋浙江学者である王自中（1188）が，岳飛の八つの側面を讃えた。「尽忠報国の忠誠心，礼賢下士の徳，軍紀厳粛，清廉（私財を蓄えない），賞罰公平，臨危不惧，選能，不貪功」。このように，岳飛が，孫である岳珂の編著の中で，洗練された武将として記述されている。

上記のような著作以外に，岳珂が1234年岳氏一族の初めての族譜『鄂国岳氏世譜』を編纂した［林汝狄・林辰 2014: 66］。その後，各地の岳氏も族譜を編纂するようになった。たとえば，清朝光緒期の1897年に宜興の岳氏（岳飛の三子岳霖の子孫）と杭州の岳氏（長子岳雲の子孫）が『唐門岳氏宗譜』を編集した。現在，その族譜が浙江図書館古籍部に収蔵されている。また，安徽省合肥の岳氏は，清朝光緒期，1948年と2009年に三回岳氏族譜を編纂している。族譜によると，合肥の岳氏は，岳飛の長男，岳雲の後裔にあたる。ここの岳氏は，「国朝文学，輔世賢良，忠有余慶，孝本伝芳」という16の文字を輩行字として使っている。しかし，杭州岳氏は，山東，湖南，宜興などの他の地域の岳氏と同じように，上記の合肥岳氏の輩行字とは異なる，乾隆帝から授かった32個の輩行

写真７　2015年の祭祀場面（岳氏宗親会の DVD 資料により）
（筆者撮影，2016年８月）。

字を使っている。上記のようなある地域の岳氏の族譜のほかに，全国各地在住の岳氏の子孫たちによって構成された岳飛思想研究会が，『中華岳氏統譜』を2012年に人民日報出版社から刊行した［岳喜高（編）2012］。2008年公安局戸籍管理部門の統計によると，全国岳氏の人口は181.6万人である［李・瀋 2012: 170-171］。彼らはすべて岳飛の子孫とは限らない。

近年，各地に分布している岳飛の子孫の間の交流活動がおこなわれ，岳氏宗親会が設立されるようになった。たとえば，杭州岳氏宗親会が浙江省，市，区の関連部門，学会などの支持の下に，2012年12月22日に設立された。会長である岳崇文によると，杭州岳氏一族が毎年，春，秋２回岳廟で岳飛祭祀をおこなっている。宗親会は，祖先祭祀のほかに，岳飛の子孫として彼ら自身の歴史の記憶や現在の状況に関する書物『岳飛和他的後裔后裔們』［岳瑞霞，岳勝利 2009］，『岳飛後裔与杭州』［林汝狄・林辰 2014］や雑誌（『岳飛後裔簡報』，『精忠情』）も発行している。

毎年の秋，岳墳・廟でおこなわれている岳氏による祖先祭祀（写真７）には，学者や区，市政府の文化行政担当者も参加している。岳氏宗親会は，岳飛の尽忠報国の精神，中華民族の英雄，一族の誇りを繰り返し強調し，「特定の過去を選択し，一定の様式のもとにこれを表象することで，『われわれに共通する記憶』を作り出し」［森村 1999: 235］，国家と地方政府との協調性とナショナルな記憶を示しながら，岳氏一族の歴史を視覚化している。

5　官学民連携の岳廟文化研究会

岳飛研究会は1984年に杭州に設立された非営利団体であり，大学，研究機関，博物館などの専門家，学者，政府の行政担当者によって構成され，杭州市園林文物局の管轄下にある。研究会は，普段の小規模な研究会のほかに，1986，1988，1991，1993，2003年に５回の全国規模の学会を開催し，多くの研究成果と論文集を刊行した［岳飛研究会

（編）1988; 1989; 1992a; 1992b; 岳飛研究会，岳飛墓廟文物保管所（編），丁亜政（著）1998; 岳飛研究会，岳飛墓廟文物保管所（編），丁亜政・潘立新（著）1999］。特に，2003年の岳飛生誕900周年の際に，杭州市岳廟管理処，岳飛研究会と浙江大学が岳飛生誕900周年及び宋学国際シンポジウムを共催し，その研究成果を出版した［龔・岳 2013］。

上記の官学中心の岳飛研究会のほかに，岳飛後裔中心の岳廟文化研究会も2015年に設立された。この研究会は実質的に岳氏宗親会であるが，岳氏一族のほかに，大学の研究者，岳廟管理処責任者などの政府の文化行政担当者によって構成され，浙江省政府に登録された浙江省城市科学研究会に所属する非営利団体である。

趣旨の中には，浙江地域文化の中には，岳飛の「尽忠報国」「忠孝双全」の精神が含まれている。西湖の岳王廟は全国重点文物保護単位であり，愛国主義の輝きが凝縮されている。これは杭州都市文化の中で海外でも一定の影響力をもつ。多くの愛国志士たちが「碧血丹心（へきけつたんしん）」の精神に励まされ，中華民族の復興に奮闘してきた。このような文化を研究し，継承することは，「正能量」（プラスエネルギーの精神力）[9]を伝播し，都市文化の創新と発展に現実的意義と歴史的意義がある。実際に，岳飛および一族の歴史，現状を記録し，本や機関誌を発行している。彼らの目標の一つは自分たちと地元の人々が代々やってきた岳飛祭祀を杭州市無形文化遺産として登録することである。

結び

以上，杭州岳王廟を中心に，忠孝と文武を兼備する南宋の岳飛に関する社会的記憶とその資源化について考察した。岳飛は，中国の英雄，項羽［韓 2015; 2016］やチワン族やベトナムの英雄儂智高［塚田 2016］と同じように，その時代の価値によって，英雄の記憶のあり方と評価が大きく左右されていることがわかる。岳飛にかんする記憶の主体は，主に王朝，地方官僚，学者，地域社会，岳氏一族の人々である。南宋から今日まで，岳飛のイメージは，時代の流れの中で武穆，忠烈，純忠純孝，民族英雄，愛国英雄，銭を愛さず，命を惜しまないという理想的な文官と武官の手本へ変わりつつあるが，岳飛は基本的に儒教的価値観が支配された社会の中で讃えられてきた。いうまでもなく岳飛の記憶は，中国文化の中で一つ重要な集団的記憶（collective memory）として確立されている。1925年に集団的記憶の概念を提起したフランスの社会学者M.アルヴァックス［Halbwachs 1877–1945］によると，過去は無意識の状態で再生されるのではない。あらゆる事柄が示唆しているように思えるのは，過去は現在という基盤から再構成される，ということである。すなわち集団的記憶とは，過去の想い出をそのまま再発見することではなく，集団の観点から過去を再構成する営みにほかならない。このような過程を経て，集団内部の成員たちによってある想い出が共有される営みは集合的記憶になる［哈布瓦赫 2002］。祭祀儀礼，生誕式典，演劇，観光，研究会の中，岳飛は歴史化され，さ

まざまな人々によって，時代のニーズに応じて，選択的に解釈され，現実との連続性が演出されている。私たちにとって，歴史はそのときの人によって構築されたものである。言い換えれば，「過去は，物語によって構築されるものであった。そして記憶は記録ではなく，現在の観点から取捨選択され，また物語を紡ぐ素材として物語に見合うように想起されるものであった」[片桐 2003: 181]。

また，岳王廟で観察されたさまざまな時代の題字，儀礼活動と建造物は，ある意味で岳王廟という場所の多義性によるものである。すなわち，王朝や国家にとって岳墳・廟は政権を維持する上でもっとも必要である忠誠心を具現化している場所である。そのため，時の為政者はここを，兵士の闘志と民衆の求心力を喚起する場所，愛国主義教育の場所として利用してきた。

民衆にとって，岳墳・廟はかつて学校の教科書で勉強した，あるいは演劇や口頭伝承で知った英雄と出会う神聖性のある場であり，忠良を殺害した奸臣たちの跪銅像や岳飛の自筆「文臣銭を愛せず，武将死を惜しまざれば，天下泰平たらん」の石碑を自分の目で確かめ，現在の官僚腐敗への不満・抵抗の気持ちを訴える場でもある。また，900年以上の歴史を持つ岳氏一族にとって，岳飛は一族の誇りであり，岳王廟は彼らの精神的帰結点であり，永遠の聖地でもある。

一方，地元政府は，岳墳・廟のもつ知名度を，地域のイメージ向上，他の地域との差異化に利用し，観光事業や文化遺産の創出などの地域開発に結びつける傾向がある。特に近年，文化，自然と文化景観を保護するグローバルな動きの中で，岳王廟および岳飛をめぐる伝説，祭祀儀礼などの有形と無形の歴史と文化は，西湖文化のカテゴリーの中に取り入れられるようになった。岳廟を含む西湖景勝地を統括する文化行政担当の陳文錦が西湖文化は，「西湖風景区範囲内のすべての自然的，文化的，有形と無形の歴史的ものの集大成」であると指摘したように［陳 2007: 26]，西湖のほとりにある岳廟は世界文化景観遺産の一部，忠孝という儒教の価値観を具現化する象徴的場所として脚光を浴びている。西湖の文化景観の特徴は，自然と文化の調和，儒・釈・道の多元的文化と価値観が長い歴史の中で伝承され調和されているところにあり，岳廟はその中の儒教的価値観を体現していると地方の文化行政担当者が解釈している。このような認識は，学者，岳氏一族と地域の人々の間で共有されているようである。一方，岳王廟の運営，管理と使用は，建国以来依然として地方政府によってコントロールされている。区，市と省政府の文化行政担当者，学者と岳氏一族はせめぎあいながら，官学民連携のかたちで毎年，２回の祭祀活動，数回の研究会と親睦会のイベントを行っている。

岳飛は中国の歴史の中で，忠孝の英雄として定着している。王朝が変わり，広大な中国の世界を支配する民族は変わるが，忠孝のシンボルとしての岳飛の意味が基本的には変わっていないように思う。英雄のイメージ作りと保持は，文献資料による歴史記憶，民間信仰，祭祀儀礼，イベント開催，モニュメントの建設などの有形と無形の形によっ

て具現化されている。そのプロセスには，王朝，政府，エリートと民衆がかかわっている。一方，歴史の出来事をめぐるさまざまな建造物，伝説，題字などによって長い時間の中で蓄積された岳飛をめぐる社会記憶は，多様性をもつ一つの巨大な象徴資本を形成している。そしてさまざまな人々が時代のニーズに応じて，この豊富な社会記憶から選択的に必要な要素を選び出し，解釈し，資源化しようとしている[10)]。

表1　岳飛の関連年表

年代	岳　飛　関　係	情　勢
960		北宋（960年-1127年），都は開封。
1090		秦檜が南京に生まれる。
1103	岳飛が3月24日相州湯陰県永和郷孝悌里（河南省安陽市湯陰県菜園鎮程岡村）農家に生まれる。字「鵬挙」。	
1114	農業をしながら独学。	北部に金朝成立。（1114-1234年）
1118	16才で劉氏と結婚。	
1120	長男岳雲生まれる。	
1122	従軍。開封を守るために遼との戦いに参加。父岳和病死。従軍中の岳飛が家に戻り，服喪3年。	
1124	従軍	
1127	25才，上書，京師の南遷に反対。抗金のため黄河をわたる。	靖康の変。金軍が開封を陥れ，徽宗，欽宗など一族多数の人と秦檜などの官吏を連れ去った。北宋滅亡。南宋（1127年-1279）。都は杭州。
1130	江蘇省靖江市生祠鎮中街に，岳王生祠が建てられた。正殿，思岳殿に岳飛の座像，その両側には，8人の大将が配祀。	
1133	31才，高宗から精忠岳飛の名称が授けられた。	
1134	金との戦いなどに軍功を挙げて，節度使に任命された。『満江紅』を作詞。	
1136	母姚氏病死。岳飛，服喪3年。	
1140	38才，岳家軍を率いて，汴京に近づく。7月末，撤退しない岳飛に苛立つ高宗は十二通の金牌で勅令を下す。最後の十二通目には，命令に背けば内乱罪で処罰すると記されていた。	
1142	39才，12月29日除夕の前夜，宋高宗，秦檜などにより杭州大理寺の獄中で殺害される。長子の岳雲，部下の張憲も殺害される。	
1155		秦檜が死亡。
1162	紹興32年，宋孝宗は中原北伐の前に岳飛生前の官職を回復させ，（一品の）礼をもってその遺骸を西湖区栖霞嶺の南へ改めて埋めた。	
1170	宋孝宗の令で武昌に最初の「忠烈廟」を建てた。	
1178	武穆の称呼が与えられた。	
1204	鄂王という王爵が与えられた。	

1221	岳飛後裔の申し出に応じて，孝宗が岳飛墓の側にある智果寺を岳氏一族に授け，「褒忠衍福禅寺 岳飛廟」の額を与えた。	
1225	宝慶元年「鄂王」，「忠武」が追封され，「武穆」が再追封された。	
1234		モンゴルが金帝国を征服。
1261	景帝２年，宋理宗が「忠武」から「忠文」へ。また岳武穆三代と部下の６人大将を追封した。	
1271		元（1271-1368）
1301	江西九江岳氏後裔が６代目の孫岳士迪を杭州に派遣し，墓の修繕と寺の管理をさせる。	
1335	～1340年杭州路総管，李全初などの地方管理が郷紳黄華父などの支持を得て，廟を修繕し，大量の松と柏などを植えた。	
1349	張憲，岳雲が岳飛の両側に配祀される。	
1361	岳王廟修繕，「保義」の扁額が新たに加わった。	
1368	福建甫田の洪珠が「尽忠」「報国」を書いた。	明（1368-1644年）都は南京。
1371	洪武４年同知馬偉が杭州岳王廟を修繕。朝廷に「忠烈廟」の額を申し入れた。	
1386	洪武９年，朱元璋が南京に歴代帝王廟を建てる際に，岳飛を37の名臣の一人とし，宋太祖に従祀。	
1449		土木堡の変。
1450	岳飛の故郷，河南湯陰に岳飛廟が立つ。	
1513	正徳８年，都指揮李隆が秦檜，王氏，万俟**卨**の銅跪像を作った。	
1558	侍御史胡宗憲が浙江視察。倭寇が浙江海岸地区に侵入。胡が尽忠報国の精神を引き起こそうとして岳飛の墓に参拝。戦功を立て，総督に昇進したのち，再び岳王廟に参拝，忠烈殿などを修繕。	
1594	万暦22年，浙江按察使・范**涞**が上記の３人と張俊の鉄跪像を増設。	
1605	万暦33年，万暦帝が関羽に「三界伏魔大帝神威遠震天尊関聖帝君」，岳飛に「三界靖魔大帝忠孝妙法天尊岳聖帝君」の称呼を与えた。二人の合祀。	
1608	廟内に岳雲を祀る祠堂を増設。	
1616	万暦43年「三界靖魔大帝保劫昌雲岳武王」命名。	満州建国
1624	天啓４年，欽差大臣傅宗龍が浙江視察，廟を修繕。啓忠，継忠，詡忠，流芳と土地の五つの祠堂増設。	
1644		清1644-1912　都は北京。
1651	順治８年，巡撫都御史範承謨が寄付して岳王廟修繕。	
1695	康熙34年 杭州知府李鐸が重修岳王廟を修繕し，忠泉を作った。	
1751	～1784年，乾隆帝が６回に浙江巡幸。３回皇后と一緒に杭州岳王廟の参拝と題字を行う。残りの３回皇子か大臣も派遣して参拝。	
1861		太平天国軍が杭州を占領。

1865	浙江布政使蒋益澧が地元の古老をたずね，墓と廟を修繕。	
1904		日露戦争（～1905）。
1905		孫文らが中国革命同盟会を結成。
1911		中華民国建立。
	蔡元培が「題西湖岳廟」を揮毫。	
1916	～1921 浙江督軍楊善德，盧永祥が廟の修繕を主催。	
1918		宮崎に箱根の環翠樓で招待された孫文が「環翠樓中乢髯客，涌金門外岳飛魂」を題字。
1929	西湖博覧会の「参考陳列所」として，国内外の電力，原材料，シルクを展示した［周 1992］。	
1931		9.18事件（満州事変）
1933	元浙江省長張載陽が民間資金を募集し，修繕を主催。さらに参観者の休憩場所として南枝巣と正気軒を増設。また，岳廟管理委員会を設けた。	
1936	馮玉祥が「民族英雄」を揮毫。	
1937		～1945年まで日本軍が杭州を占領。
1946	廟管委員会主席黄元秀が募金し，廟を修繕。	
1949	廟の国有化	
1950	杭州飯店のホールを建てるため，詡忠，流芳祠の土地が徴用。	
1956	～1983年，岳王廟が杭州市園林管理局に所属。	
1961	国務院によって「全国重点文物保護単位」に認定。民族英雄記念館として運営。	
1966	岳飛の墓，塑像などが破壊。４人の鉄跪像が行方不明。	文化大革命勃発。
1969	碑廊は「泥塑収租院」などの階級闘争教育展示として使用。	
1972		UNESCO が『世界文化と自然遺産保護条約』を採択。
1976		毛沢東死亡。
1978	省・市政府が岳墳・廟の修復。	中央政府は政治優先の観光政策を是正し，観光産業化を推進し始めた。
1979	中央副主席，副総理李先念が岳王廟を視察。 岳王廟は観光地として開放。 民族英雄記念館の体制が中止。	
1981	中央副主席，人大委員会会長，軍委副主席葉剣英が岳王廟を視察，「心昭天日」を揮毫。	
1983	中央軍委主席鄧小平が岳王廟視察。	
1984	10月１日岳飛墓廟保管所と杭州大学歴史学部が「岳飛研究会」を成立。	
1988	岳王廟で885周年生誕記念行事をおこなった。	
1991	中央政治局委員李瑞環が岳王廟視察。	
1992	１月台北岳氏宗親会が扁額を贈呈。 ５月総理李鵬が岳王廟見学。「報国為民，壮我山河」を揮毫。	世界遺産委員会が「文化的景観」を世界遺産の新たなカテゴリーとして採択。

1993	副総理李貴鮮が岳王廟見学。 岳飛暨宋史国際シンポジウムに中国，アメリカ，カナダ，韓国など90余の学者が参加。 ５月岳王廟が杭州市愛国主義教育基地に認定。	
1995	浙江省愛国主義教育基地に認定。	
1996	４月23日 CCTV による「中華民族文明之光」映画を岳王廟で撮影。	
	国家文物局，国家教委，文化部が「全国中小学愛国主義教育基地」に指定。	
1999		杭州市政府が世界文化遺産申請準備開始。
2003	岳飛生誕地，河南湯陰県政府が生誕900周年の記念行事。杭州において岳廟管理処，岳飛研究会と浙江大学が岳飛生誕900周年及び宋学国際シンポジウムを開催。	中国が世界無形文化遺産保護条約に加入した。
2004		国務院が『文化遺産保護の強化に関する通知』を頒布，全国非物質文化遺産の調査開始。
2006	４月６日タイ王室のシリントーン殿下一行が岳王廟を見学。 ４月22日中国国民党栄誉主席連戦夫婦一行が岳王廟見学。	毎年６月の第２土曜日を「文化遺産の日」と制定。中国初の国家級無形文化遺産代表リストが公布（518件）された。
2007		国家が６月10日を「文化遺産日」と制定。
2008	岳廟管理処の申請により。岳飛伝説が杭州市非物質文化遺産に登録。	
2009	５月岳廟管理処の申請により，岳飛伝説が浙江省非物質文化遺産に登録。 ６月シンガポール総理李顕龍が岳王廟見学。	
2010	９月28日世界遺産専門家が岳王廟考察。	
2011	岳王廟を含む西湖文化景観が世界遺産に登録。	２月，中華人民共和国非物質文化遺産法成立。
2012	３月30日杭州岳王廟の代表と岳飛思想研究会が台湾に行き，南投県日月潭文武廟と宜蘭碧霞宮と「兄弟廟」としての連携関係を締結。	
2015	杭州岳氏宗親会が浙江省城市科学研究会の管轄下に岳廟文化研究会として省政府に登録。	

注

1）新杭州十景とは西湖とその周辺にある十カ所の景勝地を指す。具体的に霊隠禅踪，六和聞涛，岳墓栖霞，湖濱晴雨，銭祠表忠，万松書縁，楊堤景行，三台雲水，梅塢春早，北街夢尋である。
2）2011年までに，文化景観として世界遺産名録に登録されたのは廬山と五台山である。
3）「企んだ謀略が他人に発覚する」との意味の「東窓事発」という成語の由来である。秦檜が岳飛を死に追い込んだという歴史的推定に，英雄を称えようとした民間があれこれと肉付けして潤色したと思われる。東窓の下であれこれと浅知恵を絞ろうとした秦檜に夫人・王氏が「虎を捉えるのは易いが，逃がすと難しいことになる（捉虎易，縦虎難）」と言って，「早く岳飛を殺せ」とのことを勧めた。

4）風后，力牧，皐陶，夔，龍，伯夷，伯益，伊尹，伝説，周公旦，召公奭，太公望，方叔，召虎，張良，蕭何，曹参，陳平，周勃，鄧禹，馮異，諸葛亮，房玄齢，杜如晦，李靖，李晟，郭子儀，曹彬，潘美，韓世忠，岳飛，張浚，木華黎，博爾忽，博爾術，赤老温と伯顔の37人である。
5）「土木の変」は1449年（正統14年）９月８日，交易の拡大を求めたオイラトの指導者エセンが明領に侵攻したのに対して，親征を行った明朝正統帝（英宗）が，土木堡（現在の河北省張家口市懐来県）でエセンの軍勢に大敗し，正統帝自身も捕虜となった戦いを指す。
6）台湾には岳廟および関羽と岳飛を合祀する廟が宜蘭，台北，高雄，嘉義などの都市に12カ所ある。香港にも岳廟がある。また，シンガポールの濱海南公園には岳母刺字の塑像がある。シンガポール政府が人材流失の対策として，岳飛の国に対する忠誠心をモラル教育に活用している。
7）1924–1950年の間に，日本軍が占領した８年間を除いて，18年間，600名の学生が卒業した。授業料を徴収しない学校として知られていた。
8）1966年に墓は破壊されたが，現在の墓は1979年に修復されたものである。岳飛の石碑は，当時のものである。
9）イギリスの心理学者，リチャード・ワイズマン氏の著書のタイトルに使われて，一気に広がった。「正能量」とはもともと「プラスエネルギー」という意味の科学用語だが，ワイズマン氏の本心では人間が前向きに生きていくための事柄や心理などを指して「正能量」と表現したのである。
10）2016年10月22日（土）本館で開催された国際シンポジウム「中国における歴史の資源化――その現状と課題に関する人類学的分析」において，コメンテーターの兼重努氏が，関羽と岳飛にかんする比較の必要性を提示した。関羽と岳飛が，時の為政者や民衆によって，どのような取捨選択がおこなわれたのかを整理し，研究することは，今後に残された重要な課題である。

参照文献

〈日本語文献〉
岡村志嘉子
2004　「中国の愛国主義教育に関する諸規定」『レファレンス』54(12): 69–80。
韓　敏
2015　「項羽祭祀の伝承とその文化遺産化――安徽省和県烏江鎮の『３月３覇王祭』」韓敏（編）『中国社会における文化変容の諸相――グローカル化の視点から』（国立民族学博物館論集３）pp. 153–175，東京：風響社。
2016　「項羽の歴史記憶の資源化と観光開発」塚田誠之（編）『民族文化資源とポリティクス――中国南部地域の分析から』pp. 353–374，東京：風響社。
片桐雅隆
2003　『過去と記憶の社会学――自己論からの展開』京都：世界思想社。
阮雲星
2016　「『杭州西湖の文化的景観』をめぐる世界遺産登録と市民保護活動――文化遺産の再生産」河合洋尚・飯田卓（編）『中国地域の文化遺産――人類学の視点から』（国立民族学博物館調査報告 136）pp. 51–73，大阪：国立民族学博物館。
塚田誠之
2016　「壮族の『民族英雄』儂智高に関する研究の動向と問題点」『国立民族学博物館研究報告』

40(3): 411–457。
長澤規矩也
1973 『諸史抄・宋史（岳飛伝)』東京：汲古書院。
村田雄二郎
1994 「中華ナショナリズムと『最後の帝国』」蓮實重彦・山内昌之（編）『いま，なぜ民族か』pp. 30–39，東京：東京大学出版会。
森村敏己
1999 「『記憶の形』が表象するもの」阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏己（編）『記憶のかたち――コメモレイションの文化史』pp. 225–243，東京：柏書房。
山下晋司
2007 「序　資源化する文化」山下晋司（編）『資源化する文化』pp. 13–24，東京：弘文堂。
〈中国語文献〉
陳文錦
2007 『発現西湖――論西湖的世界遺産価値』杭州：浙江古籍出版社。
龔延明・岳朝軍（編）
2013 『岳飛研究論文集匯編』杭州：浙江大学出版社。
李慧敏・瀋立新
2012 『杭州西湖岳王廟志』杭州：杭州出版社。
林汝狄・林辰
2014 『岳飛後裔与杭州』北京：中国文歴出版社。
哈布瓦赫・莫里斯
2002 『論集体記憶』上海：上海人民出版社。
何玉紅
2015 「岳飛崇祀与抗戦宣伝」『光明日報』2015年 3 月25日。
孫江・黄東蘭
2013 「岳飛叙述，公共記憶与国族認同」龔延明・岳朝軍（編）『岳飛研究論文集滙編』杭州：浙江大学出版社。
岳飛研究会（編）
1988 『岳飛研究』杭州：浙江古籍出版社。
1989 『岳飛研究　第二輯　中原文物特刊』杭州：浙江古籍出版社。
1992a 『岳飛研究　第三輯　紀念岳飛誕辰888周年学術研討会暨岳飛研究会第大届年会論文集』北京：中華書局。
1992b 『岳飛研究　第四輯　岳飛暨宋史国際研討会論文集』北京：中華書局。
岳飛研究会，岳飛墓廟文物保管所（編），丁亜政（著）
1998 『岳飛墓廟』北京：当代中国出版社。
岳飛研究会，岳飛墓廟文物保管所（編），丁亜政・瀋立新（著）
1999 『岳飛墓廟碑刻』北京：当代中国出版社。
岳瑞霞，岳勝利
2009 『岳飛和他的后裔們』北京：中国広播電視出版社。
周峰
1992 『民国時期杭州』杭州：浙江人民出版社。

岳喜高（編）
2012　『中華岳氏統譜』北京：人民日報出版社。
【宋】岳珂
1999［1218］『鄂国金佗粋編続編校注』王曾瑜（注解）北京：中華書局。
【清】馮培
1879［2004］『岳廟志略』吴平，張智（編）（中国祠墓志叢刊 53）揚州：廣陵書社。
〈英語文献〉
Scott, J.
1985　*Weapons of the Weak*. New Haven: Yale University Press.
1990　*Domination and the Arts of Resistance: Hidden Transcripts*. New Haven: Yale University Press.